ローマ人への手紙第八回質問

（祈りながら考えよう）

３：25 神はこの方を、信仰によって受けるべき、血による宥(なだ)めのささげ物として公に示されました。ご自分の義を明らかにされるためです。神は忍耐をもって、これまで犯されてきた罪を見逃してこられたのです。

（ロマ三章二五節／新改訳２０１７）

（問一）なぜキリスト教では血について語るのですか。

（問二）マタイ26章39節で、なぜキリストは「わが父よ。できますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。…」と祈って死を避けようとしたのですか。

（問三）神の御子キリストは死を恐れて死んだのに、なぜキリスト者は死を恐れないで死んでいけたのですか。

キリスト・イエスの血

（ロマ三章二五節）

世の多くの人々は、キリスト教を血なまぐさい宗教だと言って批判します。そして、日本にはそんな血なまぐさい宗教はないと申します。確かにキリスト教は血について語りますし、キリストが十字架上で流してくださった血こそ、わたしたちの救いを成り立たせる重要な要素です。それでは、どうしてキリスト教では血について語るのでしょうか。

まず第一に、わたしたちの犯した罪が血なまぐさいものであるからです。わたしたちが血なまぐさい罪を犯しさえしなければ、必ずしも血なまぐさい救いの必要もありませんでした。ですから、わたしたちが持っている罪をどう見るかが重要な分かれ道になるとも言えましょう。わたしたちが自分の

持っている問題を罪と認めるなら、キリストの血以外に救いはないはずです。

前回、わたしたちの救いは、キリストがわたしたちのためのなだめの供え物となってくださったことによって、その基礎をすえてくださったことについて学びました。キリストがそのなだめの供え物となってくださったのは、「その血によって」であり、つまり血を流されることによってなのです。パウロは、ミレトの港に、エペソ教会の長老たちを招いて、訣別説教をしたとき、その中で、「聖霊は、神が御子の血で買い取られた神の教会を牧させるために、あなたがたを群れの監督とされたのです」[1]と語り、教会を「神が御子の血で買い取られた神の教会」と呼んでいます。なんとすばらしい言い方でしょうか。同じ思想がローマ教会への手紙のこの個所にもしるされております。また、パウロは、この手紙の少しあとのところでも、「わたしたちは、キリストの血によって今は義とされている以上……」[2]と述べております。また、エペソ教会への手紙においても、「わたしたちは……御子にあって、御子の血による贖い、すなわち罪の赦しを受けている」[3]と述べています。

また、ヘブル人への手紙の中では、旧約聖書への犠牲とキリストの贖いとを関連させて説明し、次のようにしるされています。「また、やぎと子牛との血によってではなく、ご自分の血によって、ただ一度、まことの聖所にはいり、永遠の贖いを成し遂げられたのです。もし、やぎと雄牛の血、また雌牛の灰を汚れた人々に注ぎかけると、それが聖めの働きを

して肉体をきよいものにするとすれば、まして、キリストが傷のないご自身を、とこしえの御霊によって神におささげになったその血は、どんなにか私たちの良心をきよめて死んだ行ないから離れさせ、生ける神に仕える者とすることでしょう。[4]」また、ペテロもその第一の手紙で、次のようにしるしています。「ご承知のように、あなたがたが先祖から伝わったむなしい生き方から贖い出されたのは、……傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によったのです。[5]」

このように見て来ますと、キリストの血がわたしたちの救いにとって、非常に重要な役割を果たしていることがわかるわけですが、ともすると、血などという言い方は、ユダヤ的な観念だと言って批判されるのですが、ヨハネが書いた第一の手紙や黙示録にも出て来ることがわかれば、そのような批判は根拠のないものであるということがおわかりになると思います。そこでは、このようにしるされています。「もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。[6]」「イエス・キリストは私たちを愛して、その血によって私たちを罪から解き放ち……。」

それでは、「血」とは何を意味しているのでしょうか。血を、単に死と理解し、血と言わずに死と言えば十分なのだと言う人々がおります。血というようなユダヤ的表現をやめて、死ということばを使ったほうがいいというわけです。しかし、血というのは、単に死を意味しているのではありません。「肉のいのちは血の中にある[8]」ということばからもわかるよ

うに、血は死だけを意味しているのではありません。そうかと言って、いのちを表わしていると理解することも必ずしも正しくありません。ユダヤ人は、血を、暴力による死を意味するものとして理解していたようです。ですから、血、とくに犠牲としてささげられた血は、「死ぬということにおいてささげられたいのち」と考えられていました。[9]

新約聖書において、「キリストの血」という表現が見られるのは、実は旧約聖書にその背景を持っていることを知らなければなりません。バプテスマのヨハネがキリストのことを「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」[10]と言っていることも、旧約の背景のもとに言われていることがわかりますし、パウロが「私たちの過越の小羊キリストが、すでにほふられた」[11]と言っている場合も同様です。

旧約聖書を見ますと、罪を犯した者が神に受け入れられるためには、動物の犠牲が必要でした。ですから、罪を犯した者は、傷のない牛とか羊の頭に手を置いて、自分の罪を告白し、自分の罪の刑罰の身代わりとして、動物を殺し、神にならだめの供え物としてささげました。こうして罪が赦され、神に受け入れられることになったのです。旧約時代における犠牲のささげ物には、このような意味がありました。ですから、その説明としてしるされているヘブル人への手紙の中で、このように説明されているところがあります。「それで、律法によれば、すべてのものは血によってきよめられる、と言ってよいでしょう。また、血を注ぎ出すことがなければ罪の赦しはないのです。」[12]

聖書の根本的な教えは、罪を犯した者に対する刑罰は死であって、「罪が支払うべき値は死」[13]なのです。ですから、本人が死ぬのでなければ、だれかが身代わりとして死ななければならないわけです。そして、旧約時代には、動物が身代わりに殺されました。しかし、それはあくまでもキリストの身代わりの死の予表であって、旧約聖書の中においても、はっきりとキリストの身代わりの死を予告することばが預言者によって語られています。「主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。」[14] ペテロは、この預言が、キリストに成就したことをその手紙の中にしるしています。「そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。」[15] パウロはこのことを「主イエスはわたしたちの違反の罪のために死に渡され……」[16]とか、「わたしたちすべての者のために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された……」[17]と語っています。

つまり、イエス・キリストは、旧約聖書に預言されているなだめの供え物として、わたしたちの罪を身代わりに背負い、その刑罰として、十字架上で死んでくださいました。それがあの十字架上の七つのことばの四番目のことばによって表されています。「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」[18]

キリストは、十字架を前にして、あのゲッセマネの園において祈られたとき、十字架の苦しみのため、「わが魂は悲し

みのあまり死にそうだ」[19]とおっしゃり、血の汗を流しながら、[20]「わたしのおとうさま、できることでしたら、この杯がわたしから過ぎ去りますように」[21]と祈って、十字架上の死を避けようとされました。それなのに、多くのクリスチャンの殉教者たちは、死を恐れることなく、喜び勇んで、死んでいきました。どうしてなのでしょうか。神の御子のキリストが恐れおののき、クリスチャンたちが死を恐れない、まことに奇妙な、この対照的な図は、どのように説明したらいいのでしょうか。クリスチャンたちは、すでに神の怒りのさばきが取り除けられているのに、キリストの場合は、全人類の罪のために、神の怒りのさばきが、その上に臨もうとしていたからです。そして、この神の怒りが臨もうとしている場合と、神の怒りがすでに取り除けられた場合という以外に、どのようにこの両者の対照的な図を説明することができるでしょうか。そうです。キリストは全人類の罪を身代わりに背負って、十字架にかかられたのです。わたしたちが受けなければならない刑罰を、身代わりに受けてくださったのです。

ヘブル人への手紙を見ると、キリストは、大祭司として、わたしたちを罪からきよめるわざをしてくださいましたが、その時、「やぎと子牛との血によってではなく、ご自分の血によって、ただ一度、まことの聖所にはいり、永遠の贖いを成し遂げられた」[22]ということがわかります。ですから、「私たちは、イエスの血によって、大胆にまことの聖所にはいることができる」[23]ようになりました。そして、「その十字架の血によって平和をつくり、御子によって万物を、ご自分と和

解させてくださった[24]」のです。また、「御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめ[25]」てくださいます。わたしたちは、キリストが十字架上で流してくださった血によって、神のものとして買い取られ[26]、神のものとされました。主との交わりに入られたのです。

この主との交わりに入れられたのは、キリストが十字架上で流された血によります。ですから、忘れやすいわたしたちは、そのことを忘れないようにと、聖餐の礼典を守り、その時、「キリストの血にあずかること[27]」ができるわけです。こうして、キリストの「血による新しい契約[28]」の中に守られて、この世の終わりに、確かに御国へ行くことができるという保証が与えられます。

実に造り主であられるキリストは、わたしたち被造物を救ってくださるために、被造物としてこの世にこられただけでなく、その尊いいのちを、捨て、わたしたちのために死んでくださいました。それは、わたしたちを罪から救うためであり、罪のためのなだめの供え物となられたのです。血を流したということがそのことです。わたしたちの血なまぐさい罪のために、キリストは尊いいのちを捨ててくださいました。これこそ、神がどんなにわたしたちを愛していてくださるかということの証拠です。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである[29]。」

尾山令仁・ローマ教会への手紙（ロイドジョンズ・ロマ書講解要約）より

注

(1)使徒たちの働き二〇章二八節。
(2)ローマ教会への手紙五章九節。
(3)エペソ教会への手紙一章七節。
(4)ヘブル人への手紙九章一二―一四節　新改訳。
(5)ペテロの第一の手紙一章一八―一九節　新改訳。
(6)ヨハネの第一の手紙一章七節　新改訳。
(7)ヨハネの黙示録一章五節　新改訳。
(8)ヨハネのレビ記一七章一一節　新改訳。
(9) A.M.Stibbs, The Meaning of the 'Blood' in Scripture, London, 1954; Leon Morris, The Apostolic Preaching of the Cross, Grand Rapids, 1955, Chap. iii; The Cross in the New Testament, Grand Rapids, 1965.（山口昇訳「新約聖書における十字架」聖書図書刊行会、一九七七年、二三八ページ。）
(10)ヨハネによる福音書一章二九節　新改訳。
(11)コリント教会への第一の手紙五章七節　新改訳。
(12)ヘブル人への手紙九章二二節　新改訳。
(13)ローマ教会への手紙六章二三節。
(14)イザヤ書五三章六節　新改訳。
(15)ペテロの第一の手紙二章二四節　新改訳。
(16)ローマ教会への手紙四章二五節。
(17)同書八章三二節。
(18)マタイによる福音書二七章四六節。
(19)同書二六章三八節。
(20)ルカによる福音書二二章四四節。
(21)マタイによる福音書二六章三九節。
(22)ヘブル人への手紙九章一二節　新改訳。
(23)同書一〇章一九節　新改訳。
(24)コロサイ教会への手紙一章二〇節。エペソ教会への手紙二章一三節も参照。
(25)ヨハネの第一の手紙一章七節　新改訳。
(26)ペテロの第一の手紙一章一八―一九節、コリント教会への第一の手紙六章一九―二〇節。
(27)コリント教会への第一の手紙一〇章一六節　新改訳。
(28)同書一一章二五節　新改訳。
(29)ヨハネによる福音書三章一六節　新改訳。